

## 眞瀬勝康先生を送ることば

女子短期大学部長 工藤利彦

本学、女子短期大学部経営学科教授の眞瀬勝康先生は、平成 25 年 3 月末日をもって、惜しまれながらもご退職になられます。

眞瀬先生は昭和 22 年 3 月 28 日に茨城県古河町（現在の古河市）にてお生まれになりました。昭和 34 年 3 月に同町立第二小学校を卒業され、昭和 37 年 3 月に私立郁文館中学、昭和 40 年 3 月に同高等学校を卒業されました。同年 4 月に早稲田大学教育学部社会科社会科学専攻に入学されて昭和 44 年に卒業、引き続き早稲田大学大学院商学研究科修士課程へ進学されて昭和 47 年 3 月に同課程を修了されました。さらに昭和 48 年 4 月より明治大学大学院経営学研究科博士課程へと進まれ、昭和 53 年 3 月に同課程を単位取得満期退学されました。

昭和 53 年 10 月より昭和 59 年 8 月まで日本鉄鋼産業労働組合連合会中央本部書記として、調査部、国際部を担当されました。その後、昭和 60 年 9 月より昭和 63 年 3 月まで信州大学経済学部客員講師、昭和 63 年 4 月より平成元年 3 月まで明治大学経営学部兼任講師、また同時期の昭和 63 年 10 月より平成元年 3 月まで東京工学院情報専門兼任講師を勤められました。

本学へは、平成元年 4 月に女子短期大学部経営学科経営管理専攻の助教授として赴任され、平成 3 年 4 月に同学科教授に昇任されました。

先生のご専門分野は、国際経営論や国際関係論です。ご専門分野の講義や講演を直接お聴きしたことはないのですが、かつて女子短期大学部教授会の場における先生の発言には「我が国」（先生の読み方はワガコク）という言葉が頻繁に登場していたという印象があり、今になって考えると、専門性ゆえのグローバルな視点からの発言が多かったためだったのだと納得いたしております。

眞瀬先生は、平成 7 年 4 月より一年間、「ポスト社会主義社会（ク

ロアチア)の民主的転換について」という研究課題で、クロアチア共和国のザグレブ大学にて留学研修されました。さらに、平成14年9月より平成15年8月まではチェコ共和国オロモウツにあるパラツキー大学の哲学部へ客員教員として招聘留学されました。その他にも、夏休みや冬休み期間を利用した比較的短期の海外調査もたびたび実施されています。こうした度々の海外調査・滞在で得られた知見を基に話をされているためか、世間話をしている中でも、世界歴史や経済の動きを背景とした物事への独特の見方が感じられることが、これまでも幾度となくありました。一例として挙げると、一時期ブームになったライカを代表とするクラシックなカメラの話をしている際にも、資本主義と対立する社会主義経済の中におけるカメラ産業(いわゆるロシアン・カメラ)の特徴、意義などに関して、眞瀬先生は独自の視点からの解釈を述べられていました。

極めて個人的な例ではありますが、リコリスという独特の風味をもつヨーロッパの駄菓子を筆者が知ったのも、眞瀬先生からヨーロッパ土産として頂いたことが最初でした。リコリスはわが国では甘草の名前で知られる薬草で、多くの漢方薬に使われています。この薬草の駄菓子リコリスは、最初に食べたときの印象と二度目以降の印象とのギャップがとても大きく、異文化の体験と受容度を増進させるのに効果的な食べ物だと思いました。その後自らの体験を基に、実際に学生に試食させる体験型教材として、筆者はこのリコリスを用いるようになりました。眞瀬先生がそのきっかけを与えて下さったことにとても感謝いたしております。

また、眞瀬先生は国際経営論など学内の講義においては、ご自分で所有されている純金の延べ棒を実際に学生に見せて触らせながら、国際経済の中における金というものの存在意義を解説されていたとのこと。これも国際的な経済や経営関係の話を単に解説するのではなく、学生が国際的な関係を感覚的に理解できるようにと考え実践されていたものと思われます。このように現場に身を置きながら直接的に情報を入手・分析し、一方で話を聴く側に対しては、身近な事物を

題材に国際関係を論じて来られた先生なのだと理解しております。

学内運営、学部運営の面では、眞瀬先生はクロアチアでの留学から帰国された平成8年の11月から平成13年3月まで、4年5ヶ月の間、女子短期大学部長として学部の運営および学部の意見発信にご尽力なさいました。平成9年4月の文化学部開設に伴って、新たに4学科から2学科体制となった女子短期大学部の運営に当たられる一方で、議論が始まった札幌大学第三次基本計画の策定においては、いわゆる「短大問題」解決のために、引き続き女子短期大学部英文、経営2学科の転換改組を目指して、学内議論に果敢に取り組みられました。しかしながら、第三次基本計画では女子短期大学部の転換改組に対して全学的な理解が得られず、「短大問題」は解決されないままとなりました。その後、18歳人口の減少と女子の進学率の上昇に対しては、短期大学部として学生定員や入試制度の見直し等による対応策を進めていきましたが、次の第四次基本計画でも短期大学部の主張が取り入れられないまま今日に至っていることは、眞瀬先生としては残念極まりないのではないかと、お察しいたしております。

眞瀬先生は、さらに再度、平成18年4月から平成21年3月までの3年間、女子短期大学部長の任に当たられました。この期間中には、平成18年に経営学科経営管理専攻と秘書専攻の統合が行われ、また、平成20年には本女子短期大学部は財団法人短期大学基準協会による第三者評価を受けて、平成21年3月24日付で「適格」と認定されました。この第三者評価を受けるためには膨大な準備作業が必要であり、前年からの準備期間を含めて一年半ほどの時間がかかり、眞瀬部長の指令の下、まさに一大事業が完遂されたのでした。加えて、平成20年9月には札幌大学女子短期大学部開設40周年の記念式典が盛大に執り行われました。この場には眞瀬先生のネットワークにより北海道副知事を始めとして道内有力企業の社長・重役の方々が集まってくださいました。短期大学を取り巻く環境が厳しくなっていく中で、本短期大学部がこのネットワークを基盤として道内企業と連携を推し進めることができたことは、高く評価されるべきだと考えます。

平成 21 年 4 月から平成 23 年 3 月までは、宮腰昭男学長の下で、学校法人札幌大学の理事ならびに法人評議員に就いていらっしゃいました。財務担当の常勤理事として、資産運用問題の後で財政的に厳しくなってきた学校法人の運営にもご苦労なさいました。

眞瀬先生の個人的な面について述べますと、先生は教育・研究者である一方、財産形成の行動を積極的に肯定している人間でもあり、先生からはその方面の経験などの話をいろいろとお聴きする機会もありました。先生のお話では、お金は「貯める→貯まる→増える」という段階で進むのだ、その先の人生に「黄金の収穫期」がやってくる。この話には、なるほどと感心もしたのですが、この三段階の前に「返す」の段階がある人にとっては先の長い話だと思ったことを強く覚えています。

伺うところによると、退職された後、眞瀬先生は基本的な連絡先（ベースキャンプ地）はご家族のいらっしゃる東京にして、夏は札幌のお宅で涼しく過ごし、最新の AV 機材で迫力・高精細のホームシアターを楽しみ、時間があればまだに魚影が濃い北海道の山々で溪流釣り三昧にふける。冬は南に下がって台湾や東南アジアにゆったりと長期滞在する。その合間には通い慣れた東欧クロアチアは、ザグレブを時々訪ねる、という生活を目指しておられるとか。正にこれから、かねがね仰っていた「黄金の収穫期」を謳歌されるのだと思います。こうした理想的な生活を実際に送っていかれるとすれば、これはそれまでの現役時代以上にアクティブな生き方だといえます。そのためには健康な身体が絶対的な条件となりますから、是非、健康に気を付けて理想的なセカンドライフを実践し、後に続く人たちに手本を示していただきたいと思っております。

眞瀬先生は、大変気さくなお人柄で、その言動があまりにも率直であるがゆえに、相手がびっくりすることも多々あるようです。その人柄で構築されたネットワーク等が短期大学部にとって役立ったことはとても多いと、大変感謝いたしております。一方で、老婆心ながら、もう少し直截的ではない方が、眞瀬先生ご自身の今後の損失も少なく

て済むのではないかと、若干心配もいたしております。

時代は流れて、来年度より札幌大学全体の組織体制は大きく変化いたします。女子短期大学部も構成メンバーが大きく入れ替わって、新たにキャリアデザイン学科となることが決定されております。こうした中で眞瀬先生のご退職となり、これまで会議など様々な場で大きな声で大勢をリードするような発言をされてきた先生のご意見を聴くことができなくなるのかと思うと、本当に寂しく心細い限りです。しかし、この春は眞瀬先生のご自身の新しい生活への門出であるだけでなく、女子短期大学部のメンバー全員にとっても新たな出発の門出でありますので、お互いの健闘を誓って、笑顔でお別れしたいと思います。

最後に、長年にわたって女子短期大学部に多大なるご尽力を賜りましたことに対し、改めて感謝申し上げるとともに、眞瀬勝康先生のみましますご健康とご多幸を心から祈念して、送別の辞とさせていただきます。